




邪神に転生したら配下の魔王軍が
さっそく滅亡しそうなんだが、
どうすればいいんだろうか 1

ワ イ ル ド 4 4 1 1 4 4 1

蝉川夏哉

Natsuya Semikawa

アールアライト文庫 

登場人物紹介

Main Characters

マルクント

とぼくしん
賭博神。慶永とは過去に
いんねん
因縁があった。

リ・グダン

ゴブリンシャーマン族。
ドラクウの命を狙う。

ドラクウ

魔王の一人。
かんりやく
通称〈魔太子〉。軍略の天才
と言われている。

ひらのほんた
平乃凡太

元サラリーマン。
転生して異世界の邪神になる。
碁が得意。

くろかみひめ
黒髪姫

〈北の霸王〉の邪神。
『三国志』の呂布を
まつばい
崇拜している。

エリィナ

ドラクウの義妹で、
邪神官を務める。
じゆしん
素直で純真。

よしながさおり
慶永佐織

ヒラノの高校の先輩。
異世界ですでに
神をしていた。

第六章	神話の風	320
第五章	人熊 <small>フーベア</small> の邪神	216
第四章	〈淫妖姫 <small>いんようき</small> 〉の策動 <small>さくどう</small>	170
第三章	アルナハ解放	115
第二章	ゴブリンの謀略 <small>ぼうりやく</small>	52
第一章	邪神への転生	7

目次



第一章 邪神への転生

牡蠣^{かき}、という食べ物がある。

海のミルクとも言われる濃厚^{のうこう}な味わいのそれは滋味^{じみ}豊かで、煮^にても焼いてもフライにしても旨^{うま}い。

だが一番の食べ方と言えば、何と言っても生^{なま}だ。

世の中の多くの人は勘違^{かんちがひ}いしているが、スーパーで販売されている生食用^{せいじゆう}の牡蠣^{かき}は加熱用^{かねつよう}の牡蠣^{かき}よりも新鮮^{しんせつ}だというわけではない。生でも食べられるように、体内にある毒素^{どくしつ}を排出^{はいしゅつ}させる為、長時間断食^{だんじき}させた牡蠣^{かき}なのだ。痩^やせた生食用^{せいじゆう}とありのままの加熱用^{かねつよう}。どちらが旨^{うま}いかは、考えるまでもない。

……という話がまことしやかに流れると、当たり前のように加熱用^{かねつよう}を生で食べる人間^{にんげん}が現れる。生で食ったら危険だから加熱用^{かねつよう}と書いてあるのにわざわざ生で食うのだ。当然^{たうぜん}、あたる。最悪^{さいあく}の場合、死^いに到^{いた}る。

そんな奴^{やつ}は滅多^{めつた}にはいないが、稀^{まれ}にいる。

つまり、俺のことだ。

「あなた、このままじゃ地獄に堕ちますねえ」

ねっとりとした口調で目の前のオバサンが指摘する。

ここは、あの世だ。

正確に言うとか、あの世の入り口がらしいが、死後の世界であることに変わりはない。

三途の川も何もなく、あるのは雲を突く超巨大な閉じた扉と前に並ぶ役所群、そしてその門前町だけだ。何とも味気ないところであるが、まあこれがあの世というならあの世なんだろう。

そのあの世の入り口で俺が何をしているかと言えば、転入手続きなのだ。

「……そこを何とか、まかりませんかね？」

「さつきから何度も説明してるでしょう、平乃凡太さん？ あなたの考課だと、逆立ちしたって天国には潜り込めないですよ」

言いながら手にしたA4一枚の考課表とやらをばしばしと叩く。

これに生前の一切の徳と不徳が記されているというのだから驚きだ。

『無実のカエルを爆竹で爆死させた罪』『想いを寄せられていることに気付いていたにも拘らず手酷くイタズラした罪』『ジャパニーズレストランで生け簀から鯛を出して締めさ

せたのに結局一口も食べなかった罪』……」

何とも情けない行状が次々と挙げられていく。

このオバサンと向かい合っているところは、役所の相談コーナーみたいなのにパーティションで区切られているだけなので、隣には恐らく筒抜けだろう。随分と恥ずかしい。

「観念して、転生したらどうですか？」

「でも、せっかく死んだんだしなあ……」

正直なところ、この二十四年間はあまり楽しい人生ではなかった。

現世への未練も、読み続けていた週刊漫画の続きが気になることくらいしかない。それならばもう、ここでゴネて天国に潜り込んでしまおうという肚だったのだが、どうにも認められないらしい。

「仮に転生するとして、どんなのがあるんです？ 出来れば、日本で」

「日本で、ですか……」

「はい。続きが気になる漫画とかあるんで。出来れば社長の息子とか」

「そうですねえ、この考課で日本となりますと……ヤンバルホオヒゲコウモリですとか、オオダイガハラサンショウウオとかウジヒメセトトビケラとかになりますね」

「えーっと、何ですって？」

「ヤンバルホオヒゲコウモリ、オオダイガハラサンショウウオ、ウジヒメセトトビケラで

すね」

「人間ですらない？」

「ヤンバルホオヒゲコウモリは哺乳類ですよ？」

選択肢が俺の予想を遥かに下回っている。これは、非常にマズい。

転生するのがどれもレッドデータブックに載ってそうなマイナー生き物というのも辛い。転生したはいいものの、童貞で一生を終えるのがほぼ確定ではないか。

「えっと、日本に限らなければどうなります？」

「日本に限らなければ、ということとは地球にも拘りませんか？」

「えっ？」

「地球外にも範囲を広げます？」

このオバサンは何を言っているんだろう、と思つたところではたと気が付いた。地球外にも生き物があるのなら、その魂もここに来るのだろう。なるほど、一つ賢くなった。

「地球外でも異次元でも異世界でも、何でもいいです。ちよつとでも条件が良ければ」

「あら、そうならそうと言ってくればいいのに。ちよつとどいい物件があるんですよ」

「ちよつとどいい物件？」

「ええ、異世界の邪神に一柱、空気が出てましてね」

▽▽▽【魔王】

風が、吹いている。

〈廢太子〉ドラクウは馬上から自分の押し込められた大地を見つめた。

長い黒髪に鮮血のように紅い瞳。そして、乳白色の一本角。

この魔界に一〇八人いるという魔王の一人である。

武略、智略共に秀でた自分がこんな辺境に半ば追放されたことが、未だに信じられない。

辺境。

まさに、辺境であった。

大地は森林に深く覆われ、大海に浮かぶ島のように峻険な山が聳えている。

魔物は凶暴で、文明の痕跡は少ない。

(……こんなところに)

こんなところに、放逐された。

原因は負け戦だった。

近年勢力を増した(北の霸王)ことザーアイシユの軍に敗れたのだ。たった一度の敗北だったが、ドラクウはそれで全てを失った。

自分には、運がなかったのだ。そう言い聞かせる。運とはつまり、邪神の加護であった。

ドラクウは、生まれてこの方、邪神を信じたことがない。邪神に縋るなど、弱き者のすることだと唾棄してきた。

それが、こんな風に弱気になるとは。

(つまり余も、弱き者の仲間入りということか)

そう思えば自然と笑いがこみ上げてくる。自嘲だ。

(そうだ、いつそ余だけの邪神を想ってはどうか)

自分だけの邪神。

縋る為の神ではなく、ただ祈る為だけの神。

強くなくても良い。自分と共に在る邪神だ。

そういう信仰の形が、在っても良いだろう。

ドラクウは、目を閉じた。

邪神に捧げる祈りなど、全く知らない。

ただ、我流で祈りを捧げてみる。

(邪神よ、邪神よ、余だけの邪神よ。願わくは、余と共に……)

その時、ドラクウの背後で大きな爆発音がした。

ドラクウが振り返ると、そこには。

「あいたたた……」

男だ。

気配は、なかった。見たこともない服に身を包んだ男が、いつの間にかそこにいた。

「……貴方さまが、私の崇めるべき邪神か？」

口に出してから、ドラクウは恥じた。

邪神がその姿を容易に現すはずがない。大方、この辺りに住まう魔族だろう。

戦の経験も無さそうな、緊張感のない表情をしている。

邪神が世界に顕現することは決して有り得ない話ではない。

初代の大魔王に王笏を授けたのも邪神であったし、大森林の奥には邪神が憩う庵もある

という。

しかし言い伝えられる邪神の姿は、名状し難きものや屈強な肉体として知られている。

よもやこんなに弱そうな男が邪神であるはずがない。

(しかし、そう言えば、余が願ったのも強くない邪神であったか)

とは言え、まさか邪神が。

「あ、はい。はじめまして、邪神です」



▼▼▼【邪神】

いきなり落つことされて俺は盛大に尻餅をついた。

転生、と言うにはいささか乱暴である。記憶も見た目そのままだし。

あるのは神様としてちよつとした奇蹟を起こす力と……借金だ。

邪神になるまでは良かったのだが、実は転生する為の徳すら足りなかつたので前借したので。

邪神として生き抜き、晴れて天国でぐうたら生活を送る為には、人々の信仰を集め、借金を完済してさらに天国に入るのに必要なだけの徳を集めなければならない。

その額合計してざつと五億六〇〇〇万徳。現代日本人の平均生涯所^{カネ}徳^{カネ}が二億七〇〇〇万徳というから、およそ人生二回分である。

どうやったら効果的に徳が貯まる、とか、そういう話は教えて貰えなかつた。

とにかく信仰を集めていけば何とかなるに違いない。俺の勘がそう言っている。

自慢ではないが、RPGでもシミュレーションでも取扱説明書を読む前にプレイする男だ。行き詰まってから読む為の攻略本もない世界だが、その辺は先輩邪神か何かをつかま

かに出てくるものなのか。

営業だって自分の担当する地域があるもんな。邪神にもそういうのがあるに違いない。「実は我は邪神としてまだ生まれついたらばかりなのだ」

「ほう、生まれついたらばかりと。それならばその御姿にも得心いたしました。邪神も私や普通の魔族のように成長していくものなのですな」

「御姿？」

「ええ、邪神としては、少し小さくていらつしやる。私も邪神に御目に掛かる筈に浴したのは初めてのことですが、伝承にある邪神がたは皆巨大だと聞いておりましたので」

む、しまったな。

実はあの世のオバサンにも「巨大化しなくていいの？」とか聞かれていたんだった。

素うどんみたいな「素転生」でも言語関係とかは邪神基本セットに入ってるらしいんだけど、巨大化。だとか、闇の衣。とかそういうのは別売りになっていて、それぞれ徳が要るみたいなのだ。

巨大化で四〇〇万徳くらいだったと思う。さっさと借金返済したい俺としては見送りを決めたのだが。少々早計だったのかも。今にして思えば、五億も借金がある身で、四〇〇万くらい屁でもないような気がしてくる。

前世で平乃凡太をやっていた頃に付き合ひのあった印刷屋の親爺さんなんかも、一億ン

千万の借金を拵えてからの方が夜遊びも派手にやっていたしな。意外と金銭感覚なんてこんなもんなんだろう。

「うむ、実はそうなのだ。我も信仰を集めれば、次第に大きくなるだろう」

「御意にございます」

▽▽▽【魔王】

どうやら、邪神は邪神でも見習いのそれらしい。

言葉を交わしてみてもドラクウはこの無角の邪神のことをそう判断した。

聞けば、まだ邪神として生まれついたらばかりなのだという。

(それもそうだ。たった今、余が崇めようと想い定めた邪神だからな)

生まれたばかりの、邪神。

これはドラクウにとつての瑞兆だ。

何かを示すこともなく、ただ照覽する邪神。

それこそが、ドラクウの求めたものだった。崇めるが、祈り、縋らない。そういう関係こそ、この邪神となら築けるかもしれない。

▼▼▼【邪神】

このドラクウという俺の信者は何だかとても忠実そうなんで安心した。

「邪神」と来て。魔王」というくらいだから、おっかない奴が信者第一号だったらどうしようかと不安だったけれど、このドラクウは良い奴だ。ちゃんと話は聞くし。

ここが魔界のはずれっていうことはドラクウの説明で分かった。

田舎だから、多分魔族も純朴じゆんぱくなんだろう。いや、勘だけど。

徳がどうやってたら集まるかは知らないが、俺の優れたゲームとしての経験は、邪神としての信仰を集めればいいんじゃないかと囁ささやいている。

この田舎をさっさとこのドラクウが掌握しやうあくし、俺が信仰を集めれば後は寝て暮らせればいいだけという寸法になる。素晴らしきかな、俺の神生設計じんせいせきけい。

「ところでドラクウよ、もう一つ尋ねたいのだが」

「何なりと、邪神さま」

「お主の率いる部下は、どれくらいの数がいるのだろうか」

何と言っても魔王だからな。一万や二万はいるだろう。一〇万とかいると嬉しいな。

アイドルグループでも一〇万くらいはファンを動員するんだから、魔王ならそれくらい配下がいっても何もおかしいところは無い。

「そうですね、今はざっと二〇〇と言ったところでしょいか」

「二〇〇……?」

「はい、このドラクウの率いる魔王軍は、戦闘員だけですと概ね二〇〇になります」

俺は、自分の中で何かがガラガラと音を立てて崩れるのを感じた。

二〇〇、二〇〇か。

俺はドラクウから聞いた魔王軍の規模にちよつとがっかりしていた。

魔王軍なのに、二〇〇。

高校の時のクラスが四〇人だったから、アレの五倍。

全員の顔と名前が一致してしまうんじゃないか。慶永さん、元気かな。

〈廢太子〉なんて格好のいい二つ名を持っているからには、もっと強大な軍勢を率いているのかと思つたというのに。『三国志』とか某戦国シミュレーションゲームをやりこんだこの俺に言わせて貰もらうと、二〇〇なんて兵力では何も出来ない。あのテルモピリーの戦いでさえ三三〇〇人は兵士がいたのに。

二〇〇の戦力で一体どうしようというのか。

「あの……邪神さま、どうかなさいましたか?」

▽▽▽【魔王】

「うん？ ああ、我を崇める魔王の麾下としてはいささか数が少ないように思えてな」
ドラクウは密かに歯噛みした。

そうだ。少ない。精鋭はそのほとんどを（北の霸王）との戦いで失い、今や手元にあるのは敗残兵だ。そうでなければ、武略にも智略にも秀でた自分が邪神を崇めてみようかという気など起こすはずがないのだ。

「はい、邪神さま。先だって大きな戦がございまして。余の軍は敵に敗れ、その数を大きく減じたのでございます。今この辺境の地に在るのも、その負け戦の故にございまして」
「なるほどな。ちなみに、敗れた相手というのはどの程度の兵力を持っておったのか？」

「およそ、二十四万」

「二十……四万か」

「対する我が陣営は連合を組み、十九万」

そう、十九万だ。ドラクウの集めた戦力は、数の上では敵に五万劣るとはいえ、地の利もあった。

運さえあれば、負ける戦ではなかった。

「それが、今や二〇〇か」

「左様にございます」

「……敵しいな」

「はぐ」

何が厳しいな、だ。

邪神は邪神らしく祀られていればいい。戦は魔族の領分だ。照覧し、運だけ与えてくれれば何も文句は無いのだ。どうせ生まれたばかりの邪神になど、大した期待はしていない。

「なるほど、な」

「邪神さまはなにも御心配めさるな。それでも私は武略においては少々心得がありましてな。我が身くらいは守れます。二〇〇の兵もいずれば一〇倍にも増やして見せましょう」

「一〇倍??」

「はい、一〇倍の二〇〇〇もいれば、当面の安全は保たれます」

しかし、二〇〇〇と聞いた邪神の表情はどこか浮かない。

「何か御不審な点でも?」

「ああ、その二〇〇〇で身を守ることが出来たとしても……」

「出来たとしても??」

「……天下を狙うにはどうかかな、とと思ってな」

「て、天下、にございますか」

「うむ、天下だ。狙うつもりはあるのか」

ドラクウが慌てるのも無理はない。

秘めた野望は誰にも話していかないはずだった。

それをこの邪神は、初めて会ったばかりだというのを見抜いたのか。

二〇〇〇まで兵力を増やし、そこから近隣の魔王領を併呑する。

最初は奇手も使わねばならないだろうが、呼応する者も現れるはずだ。一気に魔界南方

を手中に収め、憎き（北の霸王）と事を構える為の準備を行う。

その野望を見透かしたとすれば、流石は見習いとはいえ邪神、といったところか。

伝承に現れる邪神は基本的に俗世に關心を持たないので、この邪神もその類かと思っ

いたのだが。

「……御見逸れ致しました。確かに私は、天下を掌中にせんと企んでおります」

「ならば良い。魔王たる者、望みは高く持たねばな」

「御意にございます」

そう言つて平伏するドラクウの耳には、「なんだか面白くなってきたぞ」という邪神の

吹きは届かなかつた。

▼▼▼【邪神】

ドラクウと別れ、俺は一人で魔界の森の空中散歩を楽しんでいた。

彼の邪神だからと言つて四六時中一緒にいる必要はないだろうし、やつておかないといけないこともある。何より、空中散歩というのは思ったより楽しい。

それにしても、天下だ。

こう、『三国志』とか某戦国シミュレーションゲームとかをやっていると天下統一というのを一度はやってみたくなる。

男の子の夢だ。

あのドラクウという魔王はなかなか野心家みたいなので、俺は乗っかっておくだけで天下統一を特等席で楽しめるといふ寸法である。実に素晴らしい。

邪神に転生するのも最初は気が進まなかったが、意外と良いもんじゃないか。そんなことを考えていると、目当ての物が見えて来た。

空中に、扉がある。

神界への扉だ。一見、どこにでもある普通のドアのようだ。生きているものには見えない仕掛けになっている、らしい。

繋がっている先は「この世界の神界」で、あの世ではないというところが味噌なんだぞうだ。あの世のオバサンが転生する前に教えてくれた、数少ないお役立ち情報である。

邪神だったり神になると、現世の服や食べ物はお供えされない限り入手できない。となると、それらを手する場所が必要になるわけで、その為に神界にはちよくちよく出向く必要があるらしい。もちろん、自給自足してたり滅多に神界に出てこない神様もいるそうなのだが。

とりあえず俺としても、いつまでも死んだ時に着ていた某格安衣料品店のフリースとジーンズというわけにもいかないで、それっぽい服を調達したい。

「さて、こんにちはっと」

扉を開けると、そこは神界だった。

いや、神界としか表現できない。とにかく、滅茶苦茶だ。

伊勢神宮みたいな建物の隣にバルテノン神殿があり、荘厳なサン・ピエトロ大聖堂みたいなものの横にメキシコの太陽のピラミッドが生えてたりする。仏教伽藍の間に道観が建っていて……見慣れない建物は他の星の神殿だったりするんだらうか。

そういう大神殿を取り巻くように、商店街や横町が軒を連ねていた。

凄くガヤガヤしている。神さまやらよく分からないものがうろろ歩いているのを見るのは壮観だ。

「失礼、神界は初めてですか？」

辺りを眺めていると、何やら心霊写真みたいにくすぼんやりした男が話しかけて来た。

「ああ、はい。今日転生したばかりなもので」

「なるほど。そうじゃないかな、と思いました。初神者の方はよくそんな風にしますから。ようこそ、神界へ。歓迎しますよ」

「ああ、これはどうも……」

くすぼんやりした門番から、初神者は役所に行つて登録しないとイケない、と聞かされたので取りあえず先にその登録とやらを済ませることにする。買い込んだ服なんかをぶら下げて役所に行くのは何とも間抜けだからだ。

それにしても、あの門番はなんでもくすぼんやりしているんだらうか。転生したばかりの俺でもしつかり実体があるんだが。

「それはね、信者がいなくなった神さまですよ」

役場の受付のお姉さんに聞いてみると、疑問は氷解した。

神さまは信者がいなくなり、手持ちの徳を使い果たすとああなってしまうらしい。

シーンと静まり返った受付には、俺のほかに神さまはいない。
新しい神さま、というのには最近はまだ流行らないのだそうだ。

「ずっと、ああなんですかね？」

「ずっと、ああですね。この世界が終わるまでだから……後、五十六億年くらいは門番してるんじゃないですかね」

「それはまた」

とても大変なことである。

五十六億年も門番しながら愛想笑い、というのは多分地獄より辛い。

「門番をする以外にも、他の神さまからこの神さまとかそういう役目を貰って森なんかでひっそり暮らす神さまもいますね。いわゆる属神、というものに当たります」

「属神。その場合、徳とかはどうなるんですかね？」

「属神を従えている神さまが御給金として支払う仕組みになっています」

「へえ……結構大変ですね」

「そう仰いますが、貴方もまだ初神者で信者も一人しかいませんから、気を付けなさい」

「あ」

そうなのだ。

まだ俺にはドラクウしか信者がいない。

しかも、兵力は二〇〇ぼっきり。

魔王だから強いとは思うけど、ちょっと心配になってきた。

さつきまで天下統一とか焚き付けていたんだけど、これって失敗したらとんでもないことになるよな。

「えっと、平乃凡太さん、手続きが完了しました。まずは少初位下からですね」

「少初位下？」

「はい、神さまとしてのランク、神階です」

ああ、やっぱり。邪神にもランクがあるんじゃないかな、と睨んでいた通りだ。実に面倒くさい。これが段々上がって行って、称号とか付いてくるのだ。それがどうした、というのか。

「神階の説明なんですけど……」

「ああ、いいです。興味ないんで」

「え、いいんですか？」

「はい、分からなくて困るようなら、また来ます」

「は、はあ」

なんだかお姉さんも呆れた表情だ。

かと言って興味のない話を聞くのは苦痛だし、お互いにとって良いことがないと思う。

「それよりも」

「それよりも？」

「動きやすい服とか売ってるお店の方が知りたいですね」

結論。

服は安く済ませる。

「この黒のパンツが三九八〇徳で、合わせて上も買うと……一万徳超えるなあ」

神界の一番安くてカジュアルな服屋でこれである。徳の価値がよく分からない。

最初はもっと邪神のイメージにぴったりの暗闇のローブとかそういう類の服を買うつもりだったのだが、とてもじゃないが手が出ない。一着九万八〇〇〇徳って、なんだ。買えるか、そんなもん。

借金してこの世界に転生した俺だが、端数として五〇万徳ほど持っている。持っていないが、信者も手持ち徳もなくなると幽霊みたいになっってしまうなら、あまり浪費はしたくない。

ちなみにこの店員も幽霊っぽい。こうやって地道に徳を稼いでいるのだろう。

そう言えばどうやってたら徳が貯まるのかを役所のお姉さんに聞いておけばよかったが、悔やんでも後の祭りである。

とりあえずサイズを合わせる為に、試着室へ。

カーテンを開けると、そこには視界いっぱい肌色が……

「……あ、どうもすみません」

先客である。

いや、桃源郷と言うべきか。

中々に見目麗しい黒髪の女性がわなわなと震えている。

腰まである黒髪は鴉の濡れ羽色。ほくろ一つない透き通った肌。スレンダーだが、出るところは出た体つき。特に、腰のくびれのラインが大変結構な塩梅である。

これは失礼、ということ丁重にカーテンを閉めて差し上げた。眼福である。実に眼福ではあるのだが。

「そこに直りなさい」

試着室から出てきた女性の有無を言わさぬ一言に、俺はその場に正座した。

ちなみに、清楚な袴姿だ。

店員も客も女性のあまりの威圧感に、遠巻きに眺めている。

いつの間にか、首筋に刃物が突き付けられていた。それも刀やソードなら可愛げがある。

「『三国志』随一の戦闘力を誇る呂布が愛用していたことになっている万能兵器で、かなり使いにくい。使いにくいのだが、この殺気からすると飾りではない。」

と、いうことはこの女性は恐らく方天画戟の扱いに慣れている。そんな化け物相手に戦って勝てるはずがない。

「貴方、何処のどなたですか?」

美人は声も美しい。

凛とした声は射殺するような視線と相俟って周囲の温度を下げている。

「平乃凡太。初神者です」

他に答えようがない。本当は何かの主人公のように、人に名前を聞く時は、まず自分からだろ? とかやってみたいのだが、流石に方天画戟を首に突き付けられている状況でそれは冒険すぎる。

「初神者、ね。その割には徳が充実しているように見えるけれど?」

「え、徳ですか? 手持ちは四〇万くらいしか……」

「そうじゃない。貴方の格のことを言っているの。貴方、ひよっとして『邪神?』」

「ええ、一応」

「ふうん。『邪神』の初神者、ね。道理で」

格、というのも新出単語だ。俺に理解できない言葉をあまり使わないで頂きたいが、余計なことを言うと火に油を注ぎかねない。

「ま、多分事故でしょうし。今日のところは同じ邪神同士ということで大目に見てあげる」

「ああ、それはどうも」

「但し、次はないわよ?」

「それは……もちろん」

そうか。こんな美人も邪神か。何だか得をしたような気分である。出会いの形としては最悪ではあるが。後でドラクウに自慢してやろう。

「あ、そう言えばお名前は?」

「私? そう言えはまだ名乗っていなかったわね」

既に立ち去ろうとしていた袴姿の邪神は振り返り、嫣然と微笑んだ。

「私は、『黒髪姫』。正五位上の邪神『黒髪姫』。担当は『北の霸王』よ。よろしくね、初神者さん」

「こちらこそ、『黒髪姫』」

残り香も、甘い。何だか服を買いに来て凄い美人と知り合ったものである。

しかし、今『北の霸王』って言ってなかったか? 確かドラクウがコテンパンにやられたのも、『北の霸王』じゃなかったっけ?

その辺りも含めて、ドラクゥに確認しておいた方が良さだろうか。

「お前さん、それ騙されてるぜ」

俺にそんなことを親切に教えてくれたのは〈豚飼い〉という神さまだった。

服屋から帰る途中、唐揚げ串（百二十八徳）を買おうと屋台に並んだ時に順番争いを繰り広げた神さまだ。何処となく絵本で見た猪八戒に似ている。

誘われるままにふらりと飲み屋に入り、二人で昼間からハイボールなど傾けていた。

「騙されてる？」

「おうよ。邪神になるのに五億も徳は要らねえってことさ」

「あの世でオバサンにそういう風に言われたんだけど……」

〈豚飼い〉がフンと鼻を鳴らす。やっぱり猪八戒に似ている。

どうでもいいのだが、〈豚飼い〉という神さまが豚串を食べていいものなのだろうか。

「あのな、平乃くん。あれは規定通りに邪神をやるうとした場合の話だ。実際はそんなに徳は要らないんだな。邪神基本セット、なんて言ってるが、実際には要らない能力が満載だ。例えば、大事なことを言ってる時に背後で雷鳴が轟くなんて能力に、五〇万徳も使ってるんだぜ？」

うへえ、それは知らなかった。

生きてた頃ならそんなヘマはしなかったんだろうが、まさか死んでまでそんな詐欺みたいな手口があるとは思ってもみなかった。

あの世と言うからにはこの世のしがらみから解放された世界だと思ってたんだけどな。「ざっくり言ってしまうと、だ。平乃くんに徳を貸し付けてる神用金庫とあの窓口は裏で繋がってるんだな。あそこで額の大きい貸し付けが発生すると、あの窓口のオバサンのポケットにちよっとしたお札が転がり込むっていう寸法だ」

「そりやまた阿漕な商売ですねえ」

「おう、阿漕も阿漕よ。邪神として転生するだけの素転生なら一億もあれば十分だな」

「一億ってことは……ご、五分の一？」

それは酷い。そんなにふんだくっておいて巨大化が付いていないというのも、酷い。あんまりだ。

「ま、クヨクヨすんなよ。五億の借金なんて邪神だと個人でそうそう返せるもんじゃやないが……」

「……ええっ？」

「なんだお前さん、知らなかったのか？ 邪神だと信仰を集めても徳にはならねえんだよ？」

大変なことになった。

俺のぐぐうたらしながらドラクウの天下統一を眺め、適当なところで天国で隠居生活計画が早速崩れ去ってしまった。

〔豚飼い〕によると、邪神として信仰を集める為には残酷非道なことをやらないといけないが、そんなことをしても徳は全く貯まらない、というのだ。減りもしないけど。これは参った。

貴重な徳収入源は個人で善行を積むか、定期収入を当てにするしかない。定期収入というのは、神階に応じた給料だ。

〔初神者なら、少初位下か上だろ？ あれだと月々に手取りで七万徳ちよつとじゃないかね。五億貯めるのは大変だぜ？〕

〔大変というか何というか……七千百四十三ヶ月もかかるじゃないですか！〕

〔飲まず食わずでな〕

〔ぐぬ〕

そうなのだ。飲み屋に入って分かったのだが、ここの飯は旨い。邪神なんだから飲まず食わずでも死にはしないのだが、やはり何か食べたい。服も買いたいし、どうやら神界に家も買えるようなのである。何とかしたい。

〔ま、精々信者を増やしてお供え物をたっぷり集めるんだな〕

〔集めるとどうなるんです？〕

〔そりやお前、この〔豚飼い〕さまみたいに、神界で売り捌くんだよ。ここだって、俺の店だしな〕

〔え？〕

これは驚いた。実のところ、あんまり大した神さまじゃないと高をくくっていたんだが。しかし、お供え物である。

この〔豚飼い〕の言うことが確かなら、巧くやれば徳をがっぽり稼ぐ方法があるかもしれない。

かと言って二〇〇人しか部下のいないドラクウに、それほど大量のお供え物は期待できないのである。どうしたものか。

〔正直、暇で暇でしょうがないんでな。お前さんみたいな初神者にアドバイスして回ってるんだよ〕

〔ありがとうございます〕

結局、飲み代は奢ってもらった。というかオーナーなので基本的にタダである。何かあったら連絡してもよい、ということ連絡先も教えて貰った。

しかし、これからどうしたものか。

とにかく、ドラクウを何とかするしかないな。考えることは、山のようにある。

▽▽▽【魔王】

ドラクウが野営地に定めたのは、魔の森の少し開けたところにある丘陵だった。丘の下に、小川が一筋流れている。場所として、悪くない。ここでドラクウは、あるものを待っていた。

「兄上、まだでしょうか？」

「邪神さまは、わからん。いずれは姿を見せて頂けるだろう。もう一つについては、まもなくだな」

兄、とドラクウを呼んだ少女、エリイナは不安げに丘を見下ろす。

ドラクウと、直接血は繋がっていない。父同士が義兄弟の契りを交わした間柄だったため、自然と彼らも兄妹のように育ったのだ。

兄と慕うドラクウの黒髪と異なり、エリイナの髪は燃えるような赤。それを馬の尾のように束ねている。

その放埒な髪の色に似合わず、少女は生真面目で静謐を好んでいた。本当なら、こんな逃避行などやめ、兄とともにどこかで安穩とした生活を送りたいと思っている。

そのエリイナに、〈魔太子〉ドラクウは大切な役目を言い渡してあった。

「……私のような若輩に、務まるでしょうか？」

「なに、余の妹たるエリイナに邪神官の任が務まらぬはずがない」

邪神官。

邪神の言葉を人々に伝える、預言の任に当たる者のことである。

全てを邪神に捧げるこの職業には、穢れなき乙女が選ばれることがほとんどだ。

「一度お会いした限りだが、邪神さまはお優しい方だ。エリイナのこと、無下にはするまい」

「ええ」

「さてエリイナ。おしゃべりはそこまでだ。お待ちかねのものが到着したらしい」

▼▼▼【邪神】

なんののかんと神界で時間を潰してしまい、ドラクウと合流するのが遅くなってしまった。ドラクウが心配だ。何と言っても、たったの二〇〇人である。敗残兵を引き連れて新天

地に、みたいな話だったことを考えると、追手が掛かっているかもしれない。
いや、俺が敵の大將なら確実に殺しにかかる。

未だにこの魔界というところの状況がいまいぢ飲みこめないのだが、一体どうなってるのか。中国の後漢末期や日本の戦国時代みたいに群雄割拠でばらばらと戦っているのか、それとも天下分け目の戦いにまで発展しているのか。

ドラクゥと〈北の霸王〉の戦いが、ひょっとして天下分け目の戦いだったりするんだろうか。

そうなると、挽回は難しい。

どこまで〈北の霸王〉が陣営の中身を固めているのか知らないが、後は掃討戦になる恐れがある。この辺りも含めて、ドラクゥと話を詰めるべきだろう。

後、ドラクゥはどうにも自分のことを武略と知略の天才か何かのように思っているようだが、本当はどうなのか確かめたい。仮に天才だったとして、二〇〇の兵力で何とか出来るものなのか。現代人の感覚からすると、かなり難しい。

転生したばかりでそういうことにまで気が回らなかったが、俺が空から偵察するだけでも随分と状況は違ったはずである。

そんなことを考えながら飛んでいると、小さな丘の上で取り囲まれているドラクゥたちが見えてきた。

まずい。

丘のかなり上まで追い込まれている。

守備側はどう見ても、五〇人くらいしかいない。逃げ出したのか、それとも既にやられてしまったのか……

対する敵は、一〇倍くらいはいるんじゃないだろうか。
ともかく、何とかしないと。

▽▽▽【魔王】

押し込まれている。

ドラクゥは、手元の五〇人に密集隊形を取らせた。

敵の数は、おおよそ五〇〇。大した練度でもないが、数が多い。コボルト二〇〇とゴブリン三〇〇の隊のそれぞれに将を据えているところを見ると、傭兵団の丸抱えだろう。

雇い主は……対〈北の霸王〉連合を組んでいた、魔王の誰かに違いない。

ドラクゥの首を土産に〈北の霸王〉陣営に加わろうというのだろうか、虫の良すぎる話だ。密集した陣が、丘の上に一歩退く。

立ち読みサンプル はここまで